

氏名 日 傳 晶 夫

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 甲 第 516 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和56年3月31日

学 位 授 与 の 要 件 医学研究科外科系外科学専攻

(学位規則第5条第1項該当)

学 位 論 文 題 目 CONCOMITANT PRESENCE OF ANTI-TUMOR
FFECTOR CELLS AND SUPPRESSOR CELLS IN
THE SPLEEN OF TUMOR-BEARING MICE:THE
NATURE OF SUPPRESSOR CELLS
担癌マウス脾臓における抗腫瘍細胞と抑制細胞との共存：抑
制細胞の性質

論 文 審 査 委 員 教授 小川勝士 教授 寺本 滋 教授 栗井通泰

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

免疫原性を有する腫瘍が宿主に拒絶されることなく増殖し続け得る機序を解明するために、その一つと考えられる抗腫瘍細胞の機能を抑制する細胞について検討した。Ehrlich腫瘍を移植されたマウス脾臓中には、細胞障害試験および細胞増殖抑制試験によって検出される抗腫瘍細胞が存在した。担癌末期には細胞障害活性は認められなかった。この非応答性は、細胞障害効果細胞の欠如のためではなく、抑制細胞によって機能の発現が抑制されているためだった。この抑制細胞は、ナイロンウール付着性の胸腺依存性リンパ球(T細胞)に属し、抗腫瘍活性のT細胞による部分を選択的に抑制した。この抑制細胞は生体内でも機能し、静脈内移入により腫瘍増殖を促進させ、中和実験効果を抑制した。この機能は、同系MH 134腫瘍においても認められた。脾臓摘出は抑制細胞の排除につながり、腫瘍切除と同時にを行うことによってより強い抗腫瘍性を付与することができた。抑制細胞を排除あるいは抑制することによってさらに有効な癌治療法が期待できる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究はEhrlich腫瘍移植マウスの脾に抗腫瘍細胞の機能を抑制する細胞が存在し、これがナイロンウール付着性の胸腺依存性リンパ球に属すること、および脾摘がこの抑制細胞

胞を排除して宿主に抗腫瘍性を賦与することを証明したものであるが、腫瘍が宿主に拒絶されることなく増殖する機序の一面を明白にし、また癌治療に一つの指針を提供したものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。